

1945 年 4 月・沖縄県津堅島の戦い

武島 良成

The Battle of Tsuken Island, Okinawa in April 1945

Yoshinari TAKESHIMA

Accepted April 6, 2017

抄録：本稿は、1945 年 4 月の、沖縄県津堅島の戦いの諸相を分析するものである。従来の刊行物では、日本軍が、10 倍に及ぶアメリカ軍を何度も撃退したとされてきた。本稿では、日本側の諸資料と、アメリカ側の刊行物やレポート類を突き合わせ、実際にはどうだったのかを見定める。その際、住民の動静と被害、重体の兵士の集団強制死の問題にも触れる。さらに、防衛隊の逃亡や日本軍との対立についても扱い、同島の戦いの多角的な理解に努める。

索引語：沖縄戦，津堅島，防衛隊，戦争遺跡

Abstract: This article investigates the various aspects of the battle on Okinawa's Tsuken Island in April 1945. The preceding publications report that the Japanese military repeatedly warded off attacks by American forces that outnumbered them tenfold. This article compares publications and reports on the Japanese side with those on the American side, to elucidate what really happened in the battle. In that process, the situations and casualties of the islanders and the forced deaths of seriously injured soldiers are investigated. The defection of the boei-tai and its conflict with the Japanese military is also examined in an attempt to understand the battle of the island from multilateral perspectives.

Key Words: battle of Okinawa, Tsuken Island, boei-tai, war-related site

1. はじめに

筆者は、「1945年4月1日の沖縄県読谷村北西部の軍と住民」〔武島 2016a〕、「1945年4月2日の沖縄県読谷村北東部・北西部の軍と住民」〔武島 2016b〕で、アメリカ第6海兵師団の、読谷村北部の制圧の状況を追った。それは、チビチリガマ、シムクガマなどを、個別に切り出して分析するのではなく、それらがある地域を1個の戦争遺跡と捉えて、軍と住民の関係を掘り下げるものだった。その後、沖縄市史の編纂に関わり、第1海兵師団、第7師団、第96師団による現沖縄市域の制圧の様子を検討した¹⁾。そこでは、アメリカ側の資料に現れる住民殺害の情報と、住民側の回想の照合に意を尽くした。これらに続き、本稿では、現うるま市域の津堅島の制圧の様子を扱う。

考察の目的は、今までの論稿のものと、基本的に重なる。広い範囲の地域を1個の戦争遺跡と捉え、そこでの出来事を明らかにすることを、第一義とする。その分析を、自分の授業に活かすと共に、地域・社会のニーズに応え、提供することを目指す。その際、個人や家族の戦争体験の背景について追究し、情報を提供することも重要な目的とする。また、沖縄戦について知見を蓄え、巨視的な歴史理解に繋げていくことも意識する。

今回取り上げる津堅島^{かつれん}に関して、1966年に『勝連町誌』〔福田恒禎 1966〕が、住民の協力のことなどをまとめた。次いで、公刊戦史の『沖縄方面陸軍作戦』〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968〕が、日本軍の行動を扱った。さらに、『沖縄県史：第10巻各論編9』の「解説」〔大城 1974〕が、これらの著作の限界に言及した。同書は、島民の回想記も数点収めている。その後、『津堅島の記録』〔比嘉 1990〕が、上記の刊行物をなぞった上で、新規に幾つかの回想記（『琉球新報』1983年8月31日の記事を含む）を収録した。また、『勝連町の遺跡』〔勝連町教育委員会 1993〕は、島内のグスク跡（城跡）を日本軍が陣地として使ったことに触れた。

1999年には、「津堅島要塞調査ノート」〔外間 1999〕が、戦闘の推移と住民の動きを、通史的にまとめた。その後の、『勝連町の戦争体験記録』〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006〕は、これらの刊行物の一部を再録し、新たな回想記も収めた。さらに、『沖縄の戦跡ブック「ガマ」』〔沖縄県高教組教育資料センター 2009〕、『うるま市の戦争関連遺跡と慰霊塔』〔うるま市教育委員会 2010〕も、幾つかの遺跡を取り上げた。

以上のように、小さな島（面積約1.9 km²）ではあるが、同島の戦争に言及した論稿は少なくない。とはいえ、これらは学術論文として書かれたものではなく、個々の記事には検討の余地がある。戦闘の大枠の理解についても、疑問を覚える部分がある。例えば、『勝連村誌』〔福田恒禎 1966: 381〕は、「（武島注：累計3300人の米軍の攻撃を）二回目迄は見事に之を撃退して一歩も譲らなかった」とまとめている。このような理解を、『津堅島の記録』〔比嘉 1990: 494〕、「津堅島要塞ノート」〔外間 1990: 47, 49-50〕、『勝連町の戦争体験記録』〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 312〕も再録・提示している。その際、「津堅島要塞ノート」は、日本軍がアメリカ軍を撃退したにもかかわらず、守備を放棄して脱出したとまとめている。同稿は、逃げた日本軍に代わり、防衛隊（防衛召集された兵士）が郷土・家族を守ろうとしたとしている。

このような理解が一般化しているのは、今までの論稿が、アメリカ側の刊行物や資料を使ってこなかったことの帰結である。*History of United Naval Operations in World War II*〔Morison 1961: 220-221〕や、*Okinawa: Victory in the Pacific*〔Nicolas and Shaw 1955: 90〕、あるいはFMF（艦隊付属海兵隊）偵察大隊や、第27師団のレポートのマイクロフィッシュ（これらについては末尾を参照）などを点検す

ると、米軍は撃退されたわけではなかったことがわかる。防衛隊の位置づけなどを含め、精度が高い歴史像を得るには、日米の様々な資料を照合させて検討する必要があるだろう。

本稿では、以下「2」で、津堅島の日本軍と防衛隊、住民の避難状況などを検討する。その上で、「3」で1回目の上陸を、「4」で2回目の上陸を扱い、「5」で戦場の諸相を掘り下げる。「6」では3・4回目の上陸を扱い、「7」でまとめをする。通史をつむぎだすことを主題の1つとするので、戦闘の叙述が多くなることを断っておく。また、図1として津堅島の概念図を、図2として津堅島とその周辺図を付けておいた。適宜参照されたい。



図1 津堅島概念図



図2 津堅島周辺図

2. 津堅島の状況

① 津堅島の日本軍について

『沖縄方面陸軍作戦』は、1945 年 4 月に津堅島にいた日本軍を、重砲兵第 7 連隊第 1 中隊と、独立混成第 15 連隊第 1 中隊第 3 小隊としている。前者は亭島秀雄予備役大尉を中隊長とし、兵力は約 130 人、12 センチ速射カノン砲 2、野砲 2 を備えていたという。後者は山崎実少尉を小隊長とし、兵力は 33 人、重機関銃 4、軽機関銃 3、擲弾筒 3～4 を備えていたという。全体の指揮は、亭島が地区隊長として執っていた。さらに、これらに加えて、根こそぎ動員による防衛隊（約 40 人、小銃若干）、補助看護婦（約 30 人）がいたという [防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 321]。合算すると、男子約 200 人、女子約 30 人になる。

これに対し、砲兵隊の永山清栄（一等兵かー以下、「か」は省略する）は、日本軍（防衛隊を除く）が 260 人だったと述べている [永山 1999: 133] [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 360]。砲兵隊に配属された防衛隊の安里義三と田場義啓も、300 人（防衛隊を除く）と述べている [福地 1985: 176] [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 356]。Okinawa も、日本軍を約 250 人と記しており [90]、いずれも、『沖縄方面陸軍作戦』が記す総数よりも多い。同書は、山崎小隊を 33 人としているが、歩兵小隊は通常は 50～60 人である。4 月 10 日に二手に分かれて戦ったことや(後

述),『津堅島の記録』[比嘉 1990: 496]が60人としていることから、特に歩兵がもう少し多かったのだろう。

その際、永山は、1945年1月に合流した新兵が39人だったと書いている[永山 1999: 132][うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 360]。永山を含め、新兵の多くは沖縄で召集されており、津堅島の日本軍の一定部分も沖縄県出身者だったことになる。そのことにも留意しておきたい。

それから、防衛隊の人数について、安里・田場は50人としている[福地 1985: 176][うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 356]。永山は100人ぐらいという意味のことを記し[永山 1999: 133][うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 360]、『勝連村誌』『勝連町の戦争体験記録』も、住民100人に軍事訓練をしたとまとめている[福田恒禎 1966: 380-381][うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 311]。正確な数字はわからないが、公刊戦史の数字(約40人)よりは多く、50～100人の幅の中で捉えるべきだろう。

また、防衛隊の武器について、『沖縄方面陸軍作戦』は、小銃若干と記している[防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 321]。隊員だった田場も、歩哨の時だけ小銃を渡されたと述べている[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 356]。だが、同じく隊員だった安里は、まず小銃を与えられ、実戦では捕獲したアメリカの小銃・機関銃(厳密には自動小銃か)を使ったとしている、手榴弾も、兵隊たちと同様に、7発を腹周りに巻いたという[安里 1974: 177, 180]。『勝連村誌』『勝連町の戦争体験記録』は、防衛隊員は3人に1人が小銃を持ち、1人が8発ずつの手榴弾を持ったとまとめているが[福田恒禎 1966: 380-381][うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 311]、少なくとも公刊戦史が記す以上の武装をしていたと見られる。

それから、補助看護婦について、「津堅島要塞調査ノート」は、聞き取りをしたところ13人だったとしている[外間 1999: 41]。「重砲兵第7連隊史実資料」(アジア歴史資料センターデータベース、レファレンスコードC11110162100、末尾を参照)も、約10人としており、実数は公刊戦史が記すより少なかったことになる。

② 津堅島の住民について

次に、津堅島の住民の状況を見る。戦前、同島には約1000人の住民がいた[琉球王代文獻頒布会 1943: 12]。その中で男性は、兵士として召集されただけでなく、防衛隊として沖縄本島に渡った者もいた。また、男女を問わず、内地・台湾に疎開した者や、県内で疎開した者もいた。『津堅島教育百年史』の記述からすると、児童で内地に疎開した者が48人、台湾への疎開は9人以上いたことになる[記念誌編集委員会 2002: 152-153]。ただ、安里は、内地への疎開は多くなかったと述べている[安里 1974: 908]。仕事の都合もあって、大人はあまり動けなかったのだろう。

県内への疎開については、1945年3月16日に、本島北部の国頭村に疎開した住民がいたという情報がある[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 358]。また、勝連半島に疎開した住民が、アメリカ軍の本島への上陸(4月1日)後、島に戻ってきたという話も多数残っている。その中で平敷屋(半島の東端、現うるま市)からの帰還者には、緑間栄の家族、知念トキの家族、知念彦治の妻、宮城貞雄の母らが含まれていた[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 220, 317, 321-322, 344]。彼ら・彼女らは、夜中にクリ舟を漕ぎ、照明弾が上がる中を戻ってきた。また、大石光徳とその家族は、内間(現うるま市)から、平敷屋を経由して帰ってきた[大石 1974: 919]。この他、安里義三の家族たちは、勝連城跡の近くから戻ったという[安里 1974: 909]。

この中の緑間栄は、津堅島への到着後、海岸の自然壕に入ろうとした。その時に、米軍の偵察隊に

遭遇したという [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 344]。大石光徳も、トマイ浜の北端で米軍にぶつかったという [大石 1974: 920]。田場（防衛隊）も、水産中学校の生徒がゴムボートで津堅に戻り、米軍に気づいて日本軍に連絡したと述べている [福地 1985: 188]。後述するように、これらは米軍の史料にも出てくる話であり、4 月 6 日未明の出来事だった。

島に残った住民の多くは、南西の崖に横穴を掘って隠れていた。彼らは、もともと家族ごとに小さな壕を掘っていたが、軍に注意されて、崖に頑強な横穴式を掘り直したのだった。後述するように、米軍は 6 日の調査で、残った住民を 200 人とする情報を得た。これは、先のトマイ浜で遭遇した住民から聴取したものであり、1 つの参考にとどまるが、貴重な情報である。

さて、知念トキによると、（おそらく 6～7 日に）玉野曹長がめいめいの壕に来て、絶対外に出ないように注意し、それで壕にずっと隠れたのだという [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 322]。玉野は、住民の疎開の世話をした人物でもあった [記念誌編集委員会 2002: 153]。この後 10 日に上陸した米陸軍は、11 日までの戦闘で、住民の姿を全く見なかったとしている（「第 27 師団 G-2 定期レポート」: 2—以下、頁番号は、問い合わせに対応しやすいように、武島が手元のコピーに付けた暫定的なもの）。住民は玉野の指示を遵守し、隠れ続けたことになる。その際、住民が出口を自ら塞いだという話もある [比嘉 1990: 496]。これらのことが、住民の島での死者が最小限にとどまった、無視できない要因になったと見られる。

3. アメリカ偵察隊の上陸とその前後

① アメリカ偵察隊の上陸（4 月 6 日未明）

1945 年 4 月 1 日に沖縄本島に上陸したアメリカ軍は、4 日までに、現沖縄市域やその東方の勝連半島を制圧した。そのことで、中城湾^{なかぐすく}の北岸・西岸を確保した。中城湾は泊地に適しており、米軍は安全な使用を目指していた²⁾。ただ、米軍は、湾の入り口にある津堅島に、日本軍が火砲を置いている可能性を想定していた。米軍がつくった 1 月 22 日現在の地図³⁾には、津堅島に次の施設が記載されている。南部（現津堅漁港一帯）に、沿岸防御高射砲 4、単座式両用高射砲 2、自動高射砲掩体 4、機関銃掩体 3、高射砲掩体 2。西岸（集落の西部の高台）に、高射砲掩体 1。北岸（タナカ浜沿い）に沿岸防御高射砲掩体 2。これらの火砲が残置されており、掩体に砲が配備されているならば、一定の脅威と言えた。

*History of United Naval Operations in World War II*によると、米軍は 4 月 5 日に巡洋艦 3、駆逐艦 2 を送り、津堅島などを砲撃したという [Morison 1961: 220]。『沖縄方面陸軍作戦』も、この日の 15 時 50 分頃に、アメリカの艦艇が中城湾に侵入し、知念岬（本島の南西端で、湾の南岸）や勝連半島を砲撃・掃海したとしている。これに対し、津堅島の大砲は掃海艇に命中弾を与えたが、島は徹底した砲爆撃を受けたのだという [防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 321]。この記事は、先の「重砲兵第 7 連隊史実資料」（C11110162100）を根拠としている。ただ、後で見るように、米軍は 6 日段階で津堅には重砲がないと判定しており、本当に 5 日に発砲したのか疑わしい。

さらに 16 時に、FMF 偵察大隊の 2 個中隊に、津堅島に上陸して偵察する命令が下された。以下、「FMF 偵察大隊アクションレポート」の 9, 10, 15 と坪田輝人（日系二世で偵察大隊に所属）の回想 [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 350] を軸に再現すると、偵察は次のように行われた

ことになる。両中隊は、勝連半島からゴムボートで漕ぎ出し（1台に6人ずつ分乗か）、6日の2時頃に津堅島に着いた。A中隊は、トマイ浜から陸路で南下したが、2時30分に集落の北側で銃撃を受けた。この時、軍用犬1匹が死んだ。日本軍は大砲を引き出し、擲弾筒や機関銃も持ち出して迎撃戦を始めた。A中隊は（おそらく集落の東方を通過して）島の南部に至ったが、2時45分頃に迫撃砲を浴びた。

一方、B中隊は北に向かい、島の北西などで銃撃を交えた。『沖縄方面陸軍作戦』と照らし合わせると、これは山崎小隊との交戦だった可能性が高い〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 296〕。アメリカの両中隊は、3時頃に撤収した。米軍は2人が死に、10人が負傷し、軍用犬1匹が死に、1匹が負傷して行方不明になった。また、日本兵7人を殺したと報じたが、『沖縄方面陸軍作戦』は、死んだ日本兵を2人としている〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 296〕。住民については、安里（防衛隊）の親戚が、共同墓地のところで流れ弾を受け、死んだという〔安里 1994: 909〕。

この時に上陸した人数ははっきりとはわからない。ただ、「沖縄作戦記録（改訂版）」（アジア歴史資料センター、C11110001100）は、約200人とし、「重砲兵第7連隊史実資料」は、約300～400人としている。偵察に数百人というのは多すぎるようだが、中隊が2つ上陸したので、それぐらいの人数だったとしてもおかしくはない。

この偵察行で、米軍はトマイ浜で、先に述べた住民たちと遭遇した。住民たちは、舟から荷を降ろそうとしていた。柔道経験者の大石光徳は、近づいてきた米兵を投げ、そのまま海に逃げたという。大石は浜辺の南側（島の南西）に駆け込み、日本軍に通報した〔大石 1974: 920〕。これによって、日本軍は迅速に動いたのだった。米軍は、残った2人に尋問して、島に100人の日本兵と200人の住民がいるという情報を得た。

② 本格的な上陸の前に

FMF 偵察大隊は、6日未明の偵察結果をすぐにレポートにまとめた。その後、同大隊は、他の島々の偵察も行い、9日に慶良間諸島に引き揚げて休息した。同大隊はレポートで、津堅島の日本軍は、軽機関銃を3挺かそれ以上、擲弾筒を数門、迫撃砲らしいものを1門持っているとした。また、機雷やトーチカは見当たらず、兵数については100人という数字を記した。亭島隊長は野砲を撃たせなかったが（C11110162100）、それが奏功し、秘匿に成功したことがわかる。そして、米軍は日本軍の戦力を過小評価することになり、これが10～11日の苦戦の主因になった。

その後、*Okinawa* は、米軍が津堅島への砲爆撃を、より激しく行ったとしている〔Nicolas and Shaw 1955: 90〕。この件について、日本側の回想記には、津堅島からも反撃したとするものが幾つかある。例えば、12センチ砲を担当した永山（一等兵）は、中城湾に、7日に掃海艇が、8日の10時頃に駆逐艦が入ってきたと述べている。津堅からこれらを撃ったが、やがて怖くなり逃げ帰ったという〔永山 1999: 133〕〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 359-360〕。また、安里（防衛隊）は、8日に発砲して命中弾を与えたが、猛烈な艦砲が返ってきたと記している〔福地 1985: 177-178〕。この他、砲兵隊の寺沢貞次（兵長か—以下「か」は省略する）は、9日夜に、米艦船が湾から太平洋に出るのを撃った、しかし猛烈な反撃を受けたとしている〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 374〕。補助看護婦だった根神よし子も、ほぼ同じことを記している。

米軍はこれらの砲戦で、津堅島に重砲があると認識し直したはずである。10日に、1個大隊（約1000人）という大人数を上陸させたのは、このような判断が影響したのかもしれない。なお、『沖縄方面陸軍作戦』は、米軍が、8日頃から南岸方面に浮標を設置するなどしたとしている。これに対し

日本軍は、泳ぎの得意な防衛隊に、夜間に除去させたという〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 321〕〔外間 1999: 88〕。

4. アメリカ陸軍の上陸（4 月 10 ～ 11 日）

① 4 月 10 日の戦闘—その 1

以上の準備を経て、米軍は、津堅島への本格的な攻撃に移った。4 月 10 日の朝に、第 27 師団第 105 連隊第 3 大隊を上陸させたのだった。同部隊は、予備隊として慶良間諸島に待機していたが、輸送船や L S T（戦車揚陸艦）で運ばれた。上陸場所は、偵察大隊が勧めたトマイ浜ではなく、南西側のセナハ浜、ニンギ浜（現在の津堅漁港一帯）だった。日本軍を一応警戒し、偵察隊の時と上陸場所を変えたのだろう。

『沖縄方面陸軍作戦』は、10 日の 7 時頃から艦砲射撃が始まり、島の南西に舟艇が接近し、島からも発砲したとしている〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 321〕。*Okinawa* も、艦砲射撃を 7 時に始め、7 時 20 分頃から日本軍が応戦したとしている。そして、L S T 557 が被弾し、船員 2 人が死亡し、1 人が負傷したという〔Nichols and Shaw 1955: 90〕。

『沖縄方面陸軍作戦』は、この後、8 時 30 分頃に、米軍の約 10 機が南東端を攻撃し、続いて戦車（水陸両用車）を先頭に、約 1 個大隊が、南部（セナハ浜、ニンギ浜）と南東部（アギ浜）に上陸したとしている（米軍の資料では、アギ浜への上陸は確認できないことを断っておく）。同書は、亭島が同夜に、米軍が 8 時 30 分に水陸両用車などで上陸したと報じたことも紹介している。これに対し *Okinawa* は、12 機が爆撃をしようとしたが、曇っていたため、1 機だけが爆撃できたとしている。その後、第 105 連隊第 3 大隊が、L V T（水陸両用艇）に分乗して上陸したという〔Nichols and Shaw 1955: 90〕。また、「第 27 師団作戦レポート」は、7 時に砲撃を開始し、8 時 39 分に水陸両用車の支援の下、上陸を開始したとしている〔29〕。

左手のセナハ浜に上陸したのは、I 中隊だった。その右のニンギ浜には、L 中隊が上陸したが、これが第 2 波ということになる〔Nicholas and Shaw 1955: 90〕。『沖縄方面陸軍作戦』は、日本軍は、アメリカ軍を上陸させてから射撃を始めたとしている。*Okinawa* も、当初抵抗が弱かったとし、「第 27 師団 G-2 定期レポート」も、最初の 2 波は弱い抵抗しか受けなかったとしている〔2〕。

それが、両軍が接近したところで、日本軍は I 中隊の正面（現津堅漁港～津堅小中学校の間の坂道）で、激しい抵抗を始めた。*Okinawa* は、同中隊が強い射撃を受け、横雨で視界が悪かったこともあり、この日はほとんど進めなかったとしている〔Nichols and Shaw 1955: 90〕。降雨のことは、『沖縄方面陸軍作戦』も記している〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 322〕。この戦闘について、「第 27 師団 G-2 定期レポート」は、浜辺の I 中隊に対して、集落とその後方の高台から、日本軍が射撃をしたと記している。集落も巧妙に陣地化されていたということである。米軍は、集落に住民が残っていないか気にしたが、全く残っていなかったという〔2〕。

ここでいう集落（現津堅漁港～津堅小中学校の辺り）で抵抗したのは、山崎小隊の一部だった。だが、間もなく彼らは全滅に瀕した。そこで、砲兵中隊の小銃兵が防戦にまわったという〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 322〕。米軍は、その後ろの高台からの射撃で苦戦したとしているが、安里（防衛隊）の回想記が、その様子を生々しく伝えている。坂を上がってくる米兵を、重機関銃で徹底的に狙撃し、

港の沖までが血で赤く染まったという [福地 1985: 178] [安里 1974: 910]。

② 4月10日の戦闘—その2

I 中隊の右手（ニンギ浜）から上陸したL中隊は、もう少しスムーズに侵攻した。同中隊は、集落の東方を北上した。その辺りには、12センチ砲を持つ西脇二郎中尉の小隊が配備されていた。だが、米軍の砲火で砲は破壊され、西脇らは、奥の一本松陣地に後退した。同陣地の場所については諸説あるが、「重砲兵第7連隊史実資料」（C11110162100）の記事と地図からして、36高地（現在の津堅小中学校の北東、亭島が本部を置いていた）の北側の38高地（現在、展望台などがある場所）一帯のことだろう。

L中隊は、日本軍を追い、集落の北部で山崎小隊主力と対戦することになった。亭島大尉は、間もなくこの山崎小隊を、36高地洞窟陣地（本部壕）に後退させた。同陣地に山崎らが到着したのは10時頃だったという。『沖縄方面陸軍作戦』は、山崎が、砲兵中隊の中村少尉以下（砲1門）を指揮し、洞窟陣地の防御戦を行うことになったとしている。ただ、「重砲兵第7連隊史実資料」の記述からして、いきなり本部壕に籠ったのではなく、まず一本松陣地付近を拠点にしたと見られる。

ともあれ、米軍は日本軍を集落西方の丘陵に閉じ込め、10時15分には、予備のK中隊を南部海岸に上陸させた。先に上陸していたL中隊は、同隊の支援を受けながら、島の北部に進んだ [Nicolas and Shaw 1955: 90]。その侵攻ルートにも、戦車壕など、陣地が巧妙につくられていたという（「第27師団G-2定期レポート」：2）。L中隊とK中隊は、17時30分までに島の北端に達した（「第27師団作戦レポート」：29）。両中隊は、この後、集落の西方で日本軍との対峙を続けるI中隊の支援に引き返した。その時まで、36高地一帯の日本軍は持ちこたえており、その西側の森の陣地も、北東の一本松陣地も健在だった。Okinawaは、集落の向こうの高台からの射撃が続いたと表現している [Nicolas and Shaw 1955: 90]。

夜になって米軍の攻撃がやむと、日本軍は死傷者を收容した。先の安里は、灯台方面（南東海岸付近）の米軍を夜襲して、戦果をあげたと述べている [安里 1974: 911] [福地 1985: 178-179]。事実だとすれば、10日夜のことになるだろう。

③ 4月11日の戦闘

『沖縄方面陸軍作戦』は、米軍は11日も早朝から戦車（水陸両用車）を使って攻撃してきたとしている。日本軍の死傷者は増加し、一本松陣地も占領された。このような危機の中、日本軍は36高地の洞窟から野砲1門を引き出し、一本松陣地の米軍を、榴霰弾で制圧したという [防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 322]。Okinawaも、日本軍の抵抗は、この日の序盤は頑強だったとし [Nicolas and Shaw 1955: 90]、その粘り強さを認めている。また、防衛隊員の安里も、捕獲したアメリカ軍の自動小銃を使い、「奮戦」したということである [安里 1974: 911]。

ただ、『沖縄方面陸軍作戦』 [防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 322] は、午後になって、先の野砲が迫撃砲の集中攻撃で破壊されたとしている。また同書は、亭島隊長が、一本松陣地の奪回を企図し、森の陣地の部隊とともに反撃したと記している。森の陣地にいた補助看護婦たちは、武器のない者にも手榴弾が2個ずつ配られ、斬り込みを行ったと述べている [比嘉 1989: 522] [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 333]。これは、この時のことだろう。だが、死傷者が続出し、結局、36高地に主力を集めて防戦することになった。その際、野砲第2分隊（おそらく36高地の南西に配置されていた）が、砲を破壊して合流したという。

米軍は、36高地を攻撃し、陣地前10メートルのところで手榴弾の投げ合いとなった。日本軍は残っ

た 1 門の重機関銃を使い、なお陣地を確保した [防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 322]。米軍の戦車（水陸両用車）は、集落の石垣などに妨げられて洞窟に近づけなかったが、ようやく日没前に 30 分間、洞窟陣地を砲撃したという。一方の *Okinawa* は、日本軍の抵抗は次第に低下していき、15 時 30 分までに組織的な抵抗が終わったとしている [Nicolas and Shaw 1955: 90]。そのため、米軍は慶良間諸島に帰還することになり、乗船の命令が出された。「第 27 師団作戦レポート」は、乗船時刻を 18 時としている [30]。

このように、米軍はあっさりと撤収した。その際、米軍は破壊した兵器の数を調べ、火砲（海軍砲 3, 75 ミリ砲 1, 両用砲 3）をほぼ壊したと認識していた（「第 105 連隊アクションレポート」: 12）。そのことが、早期撤収の一因だったろう。それに、中城湾への航空攻撃の恐れもあった。内地の日本軍は、同湾に米軍が入ったことに反応し、12 日未明に、陸上攻撃機 9 機で機雷の投下を図った [宇垣 1968: 492-493]。このような情勢だったので、輸送船や L S T を、なるべく速やかに慶良間諸島に引き揚げさせたかったのではなかろうか。

5. 戦場の諸相

① 戦死者について

ここで、この 2 日間の死傷者について検討する。*Okinawa* は、日本兵を 234 人殺したとし、自軍の死者を 11 人、負傷者を 80 人、行方不明者を 3 人としている。捕虜にした日本兵は 1 人もいなかったという [Nicolas and Shaw 1955: 90]。「第 27 師団作戦レポート」も、同じ数字を記している [30]。「第 27 師団 G-2 定期レポート」も、「戦果」を 234 人としている [2]。同レポートは、“during period” の「戦果」を 84 人としているが、これは 10 日が 150 人、11 日が 84 人という意味である⁴⁾。

これに対し、『沖縄方面陸軍作戦』は、10～11 日の日本軍の死者を、砲兵 44 人、第 15 連隊（歩兵）13 人としている。合計すると 57 人である [防衛庁防衛研究所戦史室 1968: 324]。また、「重砲兵第 7 連隊史実資料」（C11110162100）は、10～12 日の砲兵の死者を 46 人（他に 43, 45 人というメモ書きがある）としている。この他、寺沢（兵長）は、200 人のうち 3 分の 1 が戦死し、3 分の 1 が負傷し、約 70 人が健在だったと述べている [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 374]。補助看護婦たちも、70 人が勝連半島に向かったと述べており [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 337]、『沖縄方面陸軍作戦』は、その数を約 80 人としている [防衛庁防衛研究所戦史室 1968: 324]。さらに寺沢は、200 人の 3 分の 1 が負傷者だったとしている。後述するように、島に残った負傷者の収容に力が入れられたので、確かに負傷者は多かったはずである。

これらの情報からすると、死者（重体の者の強制死を含む）が 60～70 人、負傷者が 70 人、無傷の者が 70～80 人だったという大枠を想定できる。これに対応するアメリカ側の見積もりが、極端に不正確なのは、戦闘 2 日目の夕方に引き揚げたため、時間をかけて調べられなかったからだろう。

なお、10～11 日の戦闘では、防衛隊の死者は少なかったようである。『勝連村誌』『勝連町の戦争体験記録』は、「義勇隊」の死者が最終的に 6 人だったとしている [福田恒禎 1966: 381] [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 312]。他の史料でも、防衛隊が死んだ事例はあまり確認できない⁵⁾。防衛隊の中には、金城安義、田場義啓のように、前線で負傷した者もいたが [福地 1985: 179]、基本的に後方にいたのだろう⁶⁾。後述するように、離脱した者が多かったことも、死者の少な

さに繋がったと考えられる。

② 重体の兵士の強制死

次に、重体の兵士たちの集団強制死の問題に触れておく。4月10～11日の戦闘では、36高地の西側の、森の中陣地は占領されなかった。同陣地は奥まったところにあり、病院壕として使われていた。勤務していた補助看護婦たちの回想によると、壕はみるみる負傷兵でいっぱいになり、配属された5人では、とても対応しきれなかったという〔比嘉 1990: 522-525〕〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 332-336〕。

その後、負傷者は自力で36高地に移動し、重体の者は残って自殺せよという命令が届いたという。これは、戦況に照らして、11日の午後のことと見られる。そして、14～15人が実際に死ぬことになった。その際、重体の兵士たちは死の強制を嫌がり、色々なことを話しかけてきたという。負傷して運び込まれた田場（防衛隊）も、この命令に言及している。重傷者には、手榴弾が2発ずつ渡されたということである〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 357〕。

翌12日に、死体の後かたづけを命じられ、兵士と補助看護婦たちが、病院壕に戻ってきた。その時、沖縄出身の兵士2人が、負傷したまま生きており、36高地に運ばれたという。残った死体は、爆弾でできた穴に投げ込まれた。時間がなかったために、土を被せる代わりに木で覆ったという〔比嘉 1990: 524-525〕〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 334-335〕。『沖縄方面陸軍作戦』も、11日夜の話として、死傷者の収容、陣地の補修と共に、重傷者の自殺に言及している〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 322-324〕。

⑤ 防衛隊員らの逃亡について

もう1点、日本軍が、逃亡した防衛隊を殺そうとした件に触れておく。壕に隠れていた緑間栄は、抜刀した日本兵が、2～3人の防衛隊が逃げたのを追って、壕に来たと述べている。日本兵たちは、見つけたら首を斬ると息巻いていたという〔比嘉 1990: 541-542〕〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 345〕。文脈からして、これは10～11日のことだったはずである。緑間は、叔父が日本軍に殺された噂に触れているが、彼も防衛隊だった可能性がある。

また、この後の話になるが、安里（防衛隊）は、4月20日に津堅島に戻ってきた時に、逃亡者と間違われたと記している。安里は、逃亡した兵隊・防衛隊が沢山いたとし、「その連中は見つけしだい首を落していいということでした」と語っている〔安里：914〕。このように、具体的な話が複数残っているので、実際に逃亡者を殺そうとする事態になっていたと見られる。

なお、防衛隊の玉城盛栄と島袋政昌は、本部に配属されていた防衛隊が、（彼らを含め）「海岸線のコースをとり」、ほとんどが生き残ったと述べている〔うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 380〕。これは、逃亡した防衛隊の居場所に関する記述なのだろう。海を泳ぐこともあったということであり、目立ちにくい島の北や東の崖沿いに身を潜めていたことになる。

6. 日本軍の脱出とアメリカ偵察隊の再上陸

① 津堅島の新情勢

この後の日本軍の脱出については、紙面の都合があるので概要だけ記しておく。亭島隊長は、4月11日の20時に「玉砕」を宣言したが、12日の朝に、米軍が去ったことを知った。第44旅団司令部は、

部隊に勝連半島への撤退を指示し、亭島は夜にクリ舟で移動することにした。補助看護婦には解散命令が下され、各自が 2 個ずつの手榴弾を受け取って壕を出た [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 337]。これはいざという時に自殺する含みのものだった。他方、防衛隊は解散にならず、隊にとどまっていた者は、脱出に従うことになった。

亭島らは、13 日未明に平敷屋に着き、さらに 15 日未明に与那原^{よなばる}付近に到着した。その時に、西脇中尉らの 3 隻（10 余名）が、米艦艇の追跡を避けて津堅島に戻った。西脇らは 15 日の夜以降、36 高地の負傷兵たちと合流した。亭島らは、負傷兵を收容するために、村田軍曹ら 3 人と防衛隊 10 人を、クリ舟 2 隻で津堅島に送り、彼らは 20 日頃に到着した。西脇・村田らは、補助看護婦たちを再び集めて、負傷者をトマイ浜に搬送したが、乗船完了は 23 日の 2 時 30 分にずれ込んだ。そのため、この夜の出発を断念し、洞窟に引き返した⁷⁾。

このように兵隊たちが行き来した約 10 日間、南西の崖付近に隠れていた住民は一息ついていた。緑間栄は、米軍が引き揚げた後、食糧の芋を掘るために外に出たという [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 344]。安里（防衛隊）も、父が壕を出てヤギを殺し、洗濯もしていたと記しており [安里 1974: 913]、緊張が緩んだ様子が窺える。また、緑間は、日本兵の死体を多数発見し、顔見知りの兵隊もいたので埋葬したということである。中には、埋葬されないままの米兵の死体もあったという [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 345]。

② アメリカ軍の再上陸（4 月 23 日）と日本軍の壊滅

アメリカ軍は、4 月 10 ～ 11 日の戦闘で、津堅島の危険を除去したと考えた。だが、その後、島を日本軍に使われることのないよう、再度制圧することにした（「FMMF 偵察大隊アクションレポート」: 70）。このような米軍の方針転換は、村田軍曹らのクリ舟との接触⁸⁾がきっかけだったのかもしれない。また、FMMF 偵察大隊の坪田輝人（日系二世）は、この再制圧が、住民を捕虜にするための戦闘だったと述べている [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 351]。後の展開からして、確かにそのような意味もあったのだろう。

そして、4 月 23 日の未明、日本軍の兵士、防衛隊員、補助看護婦らが 36 高地に引き返した直後に、同大隊が津堅島を襲った。安里（防衛隊）は、米軍はこの時、北海岸から上陸したと述べている。侵攻は迅速で、安里は本部に戻る時間がなく、2 人の仲間（防衛隊か）と軍服を脱ぎ、住民の壕（南西の崖）に逃げたという [安里 1974: 914]。『沖縄方面陸軍作戦』は、上陸した米軍が、（36 高地の）洞窟陣地の入り口を塞ぎ、残っていた日本軍を爆薬や手榴弾で攻撃したと記している。14 時頃には、火炎攻撃によって西脇中尉以下 30 余名が死に、負傷者も多数出たという [防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 325]。「重砲兵第 7 連隊史実資料」（C111110162100）は、この時のことを、重機関銃が故障して米軍の接近を防げなかったと記している。この日死亡した砲兵隊は 29 人（または 30 人、31 人）で、西脇は 2 日後に死んだということである。

本部壕の壊滅について、『勝連町の戦争体験記録』は、壕を覗いた米兵を負傷兵が突き刺したので、ガソリンを撒かれたと記している [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 315]。ガソリンについては、安里（防衛隊）や、知念トキも伝聞したということである [安里 1974: 181] [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 323]。この時に壕にいた補助看護婦たちも、生々しい談話を残している。それによると、雨のような砲弾で壕が破壊され、壕の中の弾薬が爆発したのだという。補助看護婦たちは、負傷者の手当をするよう言われたが、別の兵士が離脱を促し、火を避けて 1 階に降りたという。ところがこの時に（19 時頃）、壕が崩れ、多くのものが生き埋めになった。この後、

家族を助けようとして駆け付けた住民たちが、1階の入り口を掘り、補助看護婦 10 人と防衛隊 5 人（あるいは 6 人）を救出したという [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 339-341]。掘り出したのは、米軍が去った後であり、23 日夜か 24 日未明のことだったはずである。この時、安里（防衛隊）は、壕内の住民に米兵と間違われぬように、家族の名を呼んだという。

また、2・3 階にいた負傷兵の多くは、火に焼かれた。安里は、東風平（現八重瀬町）出身の軍医の命令で、負傷者が全員薬で自殺したと聞いたというので [安里 1974: 915]、そうであれば死んだ後に焼かれたことになる。ただ、「重砲兵第 7 連隊史実資料」（C11110162100）は、猛火の中を脱出した兵隊もあり、合計 10 数人が与那原に渡ったとしている。『沖縄方面陸軍作戦』も、10 数名が生き残り、その多くは、25 日の夜に、吉川伍長の指揮で与那原に渡ったとしている [防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 325]。

③ 住民の収容の本格化

再上陸した偵察隊は、住民の収容を本格化させた。先の坪田輝人（日系二世、FMF 偵察大隊）は、まだ戦闘が続く中、住民が潜む壕の搜索に乗り出したという。坪田らが崖の下（南西の崖）に入っていくと、1 人の男が小便をしていた。「出てこい」と声をかけ、さらに近づいて、住民たちに「何もしない」と伝えた。すると、沢山の住民が手をあげて壕から出てきた。彼らを、集落の外れの戦車壕に集め、水陸両用車で、嘉間良（現沖縄市）に送ったということである [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 352]。ただ、この事例を含め、多数が収容されたのは、24 日（上陸 2 日目）以後だったろう。というのも、例えば、先の安里は、壕（南西の崖か）で家族に合流し、23 日の夜以後に本部壕を掘りに行っている。安里とその家族は、結局森の中の家族壕で手を挙げて捕虜になったが [安里 1974: 915] [福地 1985: 181]、それは 24 日（以後）だったはずである。

また、南西の崖の壕にいた知念トキらのところにも、米軍より先に、防衛隊の知念信吉がやって来て、本部壕の全滅を伝えたという。信吉は自爆を勧め、トキ・信吉の一家、合わせて約 10 人に手榴弾を配ったという。トキも晴れ着に着替えて自殺しようとしたが、信吉の子が嫌がって泣き出し、死ぬ気をなくしたという。そして、信吉の一家は、寺沢（兵長）らと共に、舟で島を脱出した。彼らは、南浮原島にたどり着いた [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 377]。この経緯からも、米軍が南西の崖下に来たのは、24 日以後と見られる。

さて、4 月 23 日（～24 日か）の戦いの後、米軍は一旦撤収した。『沖縄方面陸軍作戦』は、米軍がその後、27・28 日に上陸して、島を掃討したとしている。そして、捕虜にした住民を、勝連村南風原に移動させた。重傷者の一部も収容したという [防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 325]。手元の FMF 偵察大隊のレポートなどには、そこまで細かな情報は載っていないが、複数の回想記によって、このような段階があったことが確認できる。

例えば、先の坪田輝人は、島にまだ沢山の市民が残っていると聞いて、1 回目（23 日からの作戦）に収容した恩納善吉を案内役として、島に戻ったと述べている。そして、崖穴の近くの壕に行ったが、住民はなかなか出てこなかった。「信じておとなしく出てきなさい」と何度も呼びかけたところ、あちこちから出てきたということである [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 352-353]。また、宮良美津江も、日系二世と区長代理が壕をまわり、前回収容されなかった者を収容したとしている。その中には、岩の窪みにいた重傷の日本兵も含まれていたという [うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 386-387]。これは、永峰曹長のことだった（C11110162100）。

これら以外にも、『勝連町の戦争体験記録』は、南西の壕や岩陰での収容に関する回想を多数収め

ている[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 365, 382, 386]。もっとも、それぞれの事例が、23～24日のものなのか、27～28日のものなのか、判別するのは難しい。また、知念トキは、通訳（日系二世か）の呼びかけに応じず、東海岸に逃れたという。その小さな岩穴に1週間ぐらいいて、知り合いが訪ねてきて、ようやく収容されたのだという。

なお、緑間栄は、50メートル先の壕で、伯母が機関銃で撃たれて殺されたと聞き、手をあげて壕を出たと述べている[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 346]。また、知念トキは、「大城のお母さん」が壕を出ずに銃で殺されたと述べている[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 324]。坪田輝人も、壕から出なかった「補助看護婦のお母さん」が、銃で殺された旨聞いたという[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 353]。

7. おわりに

以上、津堅島の戦いを通観した。日本軍は、米軍を何度も撃退したのではなかった。1回目の上陸は偵察であり、2回目は、戦略目的を達成しての撤収だった。3・4回目の上陸は、掃討と住民の収容を目的としていた。その際、1・3・4回目に上陸したのは偵察大隊だった。1回目には、その2個中隊が上陸しており、兵力は数百人だっただろう。2回目は、歩兵1個大隊であり、約1000人が上陸したはずである。両部隊を合算すると千数百名になる。多くの刊行物に見られる、3300人以上の米兵を、何度も撃退したという話は、現実とかけ離れたものということになる。

ただ、それでも、日本軍が「善戦」したのは事実だった。『沖縄方面陸軍作戦』は、津堅島の日本軍は、4月以降、砲兵82人、歩兵22人が死んだとしている[防衛庁防衛研修所戦史室 1943: 325]。「重砲兵第7連隊史実資料」(C11110162100)は、砲兵隊の死者を84人（または80人、88人）と記している。この史料は、隊の6月末までの死者を場所ごとに記録しており、信憑性が高い。歩兵と合わせて、100人強が死んだと見るべきである。一方のアメリカ軍は、13人が死亡し、90人が負傷し、3人が行方不明になっていた（この他、23日にも被害を受けたはずである）。兵力差があったにもかかわらず、被害の合計はほぼ同数だったことになる。

だが、死者の数には極端な開きがあった。これは、衛生の差であるとともに、日本軍が、重体の兵士に死を強制・催促したからでもあった。このような強制は、嘉数高台（現宜野湾市）、南風原（現南風原町）の病院壕など、著名な戦争遺跡でも行われたことだった。他に、真壁（現糸満市）のアンガーや伊敷（現糸満市）の壕でなされたことも知られる[駒木根 1979: 100][岡裏 1995: 55-57][南風原文化センター 2007: 21-22][尾崎権一郎 1987: 820][糸満市史編集委員会 2003: 260-261]。日本軍の体質についての理解を深めるために、継続的に情報を集めるべき話だろう。

最後に、島民の死者だが、安里は、島で死んだのは防衛隊員を含めて10人ぐらいとしている[安里 1974: 915]。このうち防衛隊（義勇隊）の死者を、地誌類は6人としている。今回、筆者がはっきり確認できた防衛隊の死者は、松根源次郎だけだった（他に、緑間栄の叔父も防衛隊だった可能性がある）。松根は、日本軍の脱出後、西の海岸で戦って死んだようである[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 325][外間 1999: 40]。防衛隊以外の住民の死については、4件を確認した（重複している可能性もある）。

このような少なさの原因は、防衛隊については、僥倖という面もあった。それに加えて、10～11

日と23日の戦いで、彼らが逸早く離脱したことも見逃せない。防衛隊は自主的に戦おうとしたのではなく、自らの生存を優先させたのだった。防衛隊以外の住民については、日本軍と別の場所に隠れたことが大きい。その結果、米軍は10～11日には、住民と全く接触しなかった。住民は壕から出ず、流れ弾に当たることも避けられた。23日の戦いでも構図は同じであり、戦闘に直接には巻き込まれなかったのである。それでも、敗残の防衛隊が集団自殺を呼び掛けるなど、大きな犠牲が出る可能性はあった。補助看護婦も、状況次第で全員が死んだ可能性もある。死ぬ死なないは、紙一重の差だったと言える。

(付記) 本稿の脱稿後、『沖縄県史・各論編6(沖縄戦)』[沖縄県教育庁文化財課史料編集班 2017: 162-163] が刊行され、津堅島の戦いにも触れている。併せて参照されたい。

注

- 1) 筆者の論稿は、『沖縄市史: 第5巻戦争編』の中で、2018年度に刊行予定。
- 2) 「島嶼司令部アクションレポート」は、津堅島への攻撃が、中城湾・金武湾へのアプローチの保障のためとし[112], 「FMMF偵察大隊アクションレポート」も、同島が中城湾を停泊地として使うのを阻んでいたためとしている[9]。
- 3) 『平和の炎: 8』[読谷村総務部企画課 1995: 5-6] の“Defence Installations of Southeastern Okinawa Shima and adjacent islands Nansei Shoto as of 22 January 1945”による。
- 4) 「第105連隊アクションレポート」も、初日に150人を殺したとしている[10]。
- 5) 津堅小学校の教員だった松根源次郎は、防衛隊として戦死したが、これは10～11日の戦いの後のことだったようである(後述)。
- 6) 田場は、大砲を動かす時に木々の処理をするのが防衛隊の役割だったと述べている[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 357]。これが、後方での勤務の1つの類型だったと言えよう。
- 7) 以上の根拠は、『沖縄方面陸軍作戦』[防衛庁防衛研修所戦史室 1968: 324-325], 「初年兵」[永山 1999: 133-135], 『勝連町の戦争体験記録』[うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会 2006: 211, 360-361, 374-377], [安里 1974: 912-914], 『防衛隊』[福地 1985: 183], 「重砲兵第7連隊史実資料」。なお、この時に与那原にいた連隊(本隊)の将兵の様子は、「中城湾要塞重砲隊」[島袋 2011: 368]を参照。
- 8) 津堅島に戻る途中、アメリカの軍艦にクリ舟を沈められたことを指す[安里 1974: 911]。

文献一覧

- 安里義三. 1974. 「津堅島防衛隊」沖縄県教育委員会編『沖縄県史: 第10巻各論編9(沖縄戦記録2)』沖縄県教育委員会: 907-915.
- 防衛庁防衛研修所戦史室. 1968. 『沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社.
- 福田恒禎. 1966. 『勝連町誌』勝連村役所.

- 福地暁昭. 1985.『防衛隊』沖縄時事出版.
- 南風原文化センター. 2007.『沖縄陸軍病院 南風原壕群』南風原文化センター.
- 比嘉繁三郎. 1990.『津堅島の記録』沖縄自分史センター.
- 外間愛子. 1999.「津堅島要塞調査ノート」『具志川市史だより』14: 37-50.
- 糸満市史編集委員会編. 2003.『糸満市史：資料編 7（戦時記録上巻）』糸満市役所.
- 勝連町教育委員会. 1993.『勝連町の遺跡：遺跡詳細分布調査報告（勝連町の文化財第 17 集）』勝連町教育委員会.
- 記念誌編集委員会. 2002.『津堅島教育百年史「東海」』津堅小中学校 100 周年記念事業期成会.
- 駒木根康. 1979.『証言 沖縄戦秘録：青春かく戦えり』紀元社出版.
- Morison, Samuel Eliot. 1961. *History of United Naval Operations in World War II : Victory in the Pacific 1945*. Boston. Little, Brown and Company.
- 永山清栄. 1999.「初年兵」町史編集委員会編『東風平町史：戦争体験記』東風平町役場：132-142.
- Nicolas, Major Chas. S, Jr., Shaw, Henry I, Jr.. 1955. *Okinawa: Victory in the Pacific*. Washington: Historical Branch G-3 Division Headquarters U. S. Marine Corps.
- 大石光徳. 1974.「戦闘協力」沖縄県教育委員会編『沖縄県史：第 10 巻各論編 9（沖縄戦記録 2）』沖縄県教育委員会：919-921.
- 岡襄. 1995.「私は青酸カリを飲まされた」南風原町文化センター編『戦争遺跡（壕）の保存活用を考える：南風原町平和ウィークの記録』南風原町文化センター：52-59.
- 沖縄県高教組教育資料センター編. 2009.『沖縄の戦跡ブック「ガマ」』沖縄時事出版.
- 沖縄県教育庁文化財課史料編集班編. 2017.『沖縄県史：各論編 6（沖縄戦）』沖縄県教育委員会.
- 大城将保. 1974.「解説」沖縄県教育委員会編『沖縄県史：第 10 巻各論編 9（沖縄戦記録 2）』沖縄県教育委員会：899-905.
- 尾崎権一郎. 1987.「沖縄戦従軍記」西原町史編纂委員会編『西原町史：第 3 巻資料編 2（西原の戦時記録）』西原町役場：807-830.
- 琉球王代文献頒布会編. 1943.『琉球王代文献集：第 8 輯』琉球堂本舗.
- 島袋全裕. 2011.「中城湾要塞重砲隊」与那原町史編集委員会編『与那原の沖縄戦（与那原町史戦時記録編）』与那原町教育委員会.
- 武島良成. 2016a.「1945 年 4 月 1 日の沖縄県読谷村北西部の軍と住民：チビチリガマ、シムクガマの周辺」『京都教育大学紀要』129: 15-29.
- . 2016b.「1945 年 4 月 2 日の沖縄県読谷村北東部・北西部の軍と住民」『京都教育大学紀要』129: 31-46.
- 知念トキ. 1974.「子どもをかかえて」沖縄県教育委員会編『沖縄県史：第 10 巻各論編 9（沖縄戦記録 2）』沖縄県教育委員会：915-919.
- 宇垣纏（小川貫爾，横井俊幸編）. 1968.『戦藻録』原書房.
- うるま市勝連地区戦争体験記録編集委員会編. 2006.『勝連町の戦争体験記録』うるま市教育委員会.
- うるま市教育委員会. 2010.『うるま市の戦争関連遺跡と慰霊塔（うるま市文化財調査報告書第 12 集）』沖縄県うるま市教育委員会.
- 読谷村総務部企画課. 1995.『平和の炎：8 沖縄戦直前米軍資料全翻訳』読谷村役場.

アメリカ海兵隊歴史センター旧蔵「米海兵隊太平洋戦争記録」（資料番号，年代，ファイル名，その中で本稿で引用した史料の仮訳名）

65A-5188; 18-15. 1945. Ampt Recon Bn. FMF. Action Report – Okinawa（「F M F 偵察大隊アクションレポート」）.

65A-5188; 18-16. 1945. Island Command. Action Report 13 Dec 44 – 30 Jun 45 – Okinawa（「島嶼司令部アクションレポート」）.

65A-5188; 22-14. 1945. 27th InfDiv, G-2 Periodic Reports 5 – 23 – Okinawa（「第 27 師団 G-2 定期レポート」）.

65A-5188; 22-15. 1945. 27th InfDiv, Operation Report 1 Jan – 30 Jun 45, Nansei Shoto, Phase I – Okinawa（「第 27 師団作戦レポート」）.

アメリカ国立公文書館蔵「米陸軍省高級副官部文書」（マイクロフィッシュ番号，年代，ファイル名，その中で本稿で引用した史料の仮訳名）

WOR 42469. 1945. 105th Infantry Regiment – Action Report – Tsugen Jima (9-11 Apr 1945)（「第 105 連隊アクションレポート」）.

J A C A R（アジア歴史資料センター）データベース（レファレンスコード，年代，その中で使用した主な史料）

C11110001100. 1949.「沖縄作戦記録（改訂版）」.

C11110162100. 1947.「重砲兵第 7 連隊史実資料」.